

Alternative Systems Study Bulletin

第11巻第5号

(2003年12月20日)

社会病理の解決を求めて 第2回

第三章 木村敏の「あいだ」に学ぶ

今日の社会病理とは何か、それをどう解決するか

NS ワーカーズの活動の基本的考え方

上野千鶴子の家族論への疑問

後記

編集 境 毅
連絡先 〒600-8691 京都市下京区東塩小路町 京都中郵私書箱 169 号 貿易研究会
ホームページ <http://homepage1.nifty.com/office-ebara/>
メール kyw04500@nifty.ne.jp

会費 正会員 : 年間 1口 10万円
賛助会員 : 年間 1口 3万円
購読会員 : 年間 1口 1万円
振込先 口座名 : 資本論研究会
(郵便振替) 口座番号 : 01090-5-67283

社会病理の解決を求めて 第2回

第三章 木村敏の「あいだ」に学ぶ

1) はじめに

心が病む、ということと 関係が病む、と捉えるとき、思い当たるのは、木村敏だ。彼は以前から気になっていて、本も集めてページを繰ってみたことがあったが、頭に入ってこず、体系的に読めなかった。ところが『心の病理を考える』（岩波新書）を今回読んでみて、社会病理について考える際の必須のステップだということが判明した。他の本は手離してしまったので、手元にあるのはこの本だけだ。とりあえず、この本について思いつくところを書くことで、木村敏に学ぶことにする。

2) 人と人との「あいだ」

木村は合奏するとき、自分自身の演奏と全体との間に感じられる実感を手がかりにして、人と人との「あいだ」についての考察をしている。合奏の場合、「数人で合わせている合奏音楽の全体が、個人の意志を越えたひとつの強大な意志を持ち始め、まるで一個の生きものであるかのように感じられてくる」（7頁）。この全体は、個々の奏者の意志を規制しつつも、他方で、個々の奏者がやめしまうと消失してしまう。木村はこの事情について、印象深い叙述を与えている。

「つまりそれは、私の演奏を細部にいたるまで規制しているものなのに、その一方で、私個人が自分自身の演奏を通じて作り出しているものでもあるということになる。だから、この合奏全体の大きな意志と私個人の意志とは渾然一体となって区別ができない。私の動きが全体の意志の中へ吸収されてしまっているともいえるし、私が自分の意志の中へ全体の動きを統合しているとも言える。」（73～4頁）

この合奏中にみられる自分の意志と全体意志との「二重意志」あるいは「二重主体」の体験は、単に音楽だけでなく、普通の会話にも見られるとして、木村は他に会話の例をあげている。

このような体験から、木村は、人と人との「あいだ」を抽象的な観念としてではなく、具体的で実体的な意志の力のようなものとして考えるようになったと述べている。この木村の発見した「あいだ」は実体的なものとしてあるのは関係のうちでのみであり、かつ、それも認識対象としては成立不能で、もっぱら経験できるものとしてのみある。もうすこし、木村の説明を引用しておこう。

「合奏音楽や会話を成立させているのは、それに参加している個々の個人の「あいだ」ではたらいっている何らかの大きな力であって、この意志の力は、見方によって個々の個人の主体的意志によってはじめて成立するものにも見えるし、逆にそれ

がはたらくことによって、はじめて個々の主体が主体として成立するようにも見える。ここで『主体』というのは、合奏や会話というアクチュアルな場を構成する行為の主体という意味である。

このような『あいだ』のはたらきをリアルな認識対象として、——たとえば音楽を単に音として聞くだけ、会話をテープに録音してあとからそれを分析するだけの立場から——捉えることは絶対に不可能である。それを経験しようとするれば、みずからその行為の中へ身を置いて、行為を通じてそれを感じとるほかはない。……私はときどき、私が『あいだ』というものを実体化しすぎているという趣旨の批判を受けることがあるけれど、行為の立場に立つ限り、『あいだ』はつねに実体的に成立し、実体的に経験されるものなのだ。これを認識の立場での、リアリティの実体化と混同するのは間違いである。」（75～6頁）

このような木村の「あいだ」の把握は、ミードが、他者の態度を取得することで、自我が二重化すると述べたことと同じ事柄なのだが、木村の説の特徴は、これを精神病理の解明に役立てようとしたことにあった。

3) 精神病理と「あいだ」

木村敏が精神科医になり、精神分裂病（統合失調症）に直面したとき、「『人と人とのあいだ』として概念化できるアクチュアリティと、患者個人の自己主体との関係がうまくいっていないのではないか」（76頁）という考えをいだいたという。そして木村はその後の研鑽で、この考えをうまく言語化できるようになったと述べている。その経過を追体験してみよう。

木村がたどった道は、ビンスワーカーの『精神分裂病』の翻訳の際の、西田哲学と対比させながらのハイデッガー哲学の研究だった。木村は自らの問題意識を哲学的には次のようにまとめている。

「ビンスワーカーは分裂病を世界内存在としての現存在の病態と見なしているが、この世界内存在というのは、ハイデッガーでは現存在の出立あるいは超越のことであり、西田はそれを『自己が<絶対の他>のうちで自己に出会うこと』と捉えている。そのような『自己』の病としての分裂病を考えてみたい、それを私は、自分のライフワークとして心に抱いていた。」（77頁）

このような見地を木村はまず日独のうつ病患者の罪責体験の比較に生かしてみた。「ドイツ人の罪責体験が、個人の内面的な負い目の体験として完結しているのと違って、日本人の場合には、自己の怠慢や過失によって周囲の人たちとの間柄が傷つけられるということが罪の指標になっているという結果がえられた。」（77～8頁）

つまり、ドイツ人の場合、キリスト教の神という超越者と直結した自己内面的な価値基準があるのに対し、日本人の場合には、自己を取り巻く間人間的な「あいだ」を価値基準としている、というのだ。

「私はこのことから、『あいだ』というのは単に自己と他者のあいだに広がっている外在的・空間的な場所のようなものであるだけではなく、同時に内在的でもあ

り、さらに価値基準としての超越性も備えた重層構造として理解しなくてはならないと考えるようになった。そしてこれは、私が以前から音楽体験を通じて漠然と考えていたこと、つまり、自己主体というものは単に自己内在的であるのではなく、集団全体のあいだにあらかじめ取り込まれるという形で自己の外へ出立しており、しかも何らかの非人称の意志によって抗いがたく律せられているという『二重主体』的な構造と厳密に対応するものだと考えた。」(78頁)

木村は、日本人の念頭にある「あいだ」は、ドイツ人の神と同じく、価値基準としての役割をはたしていることから、「あいだ」は、空間的な場所であるにとどまらず、価値基準としての超越性ももったものであり、自己は自分一人で完結しているのではなくて、集団全体に取り込まれる形で自己の外へも出立していて、非人称の意思に抗いがたく律せられている、という。

このうつ病研究と並行して、木村は脳波の仕事もやっていて、てんかん発作特有の異常波が、急性精神症状がおさまって患者の意識が安定を取り戻したとき頻発するという現象を発見したという。そして、ここから、木村は、「非定型精神病やてんかんの世界は、本質的に祝祭の世界である」(88頁)と、結論づけているが、これについての詳細の紹介はひかえておこう。

木村によれば、こうした回り道をして、いよいよ分裂病の研究に取り組み、「分裂病の基本障害を自己の『個別化の原理の障害』として捉える見かたを世に問うた」(88頁)。

「つまり私たち大多数の人間は、普段は当然のこのように個別的自己として大勢の他者との『あいだ』を生きているのだが、それを可能にしている根本的な原理、さらに言えば、ハイデッガーが『現存在』の根本体験としての『世界内存在』の性格として述べているところの『そのつど私の存在』という『各自性』を可能にしている原理そのものが分裂病では成立不全に陥っていることを表現したかったからである。」(89頁)

木村はニーチェが『悲劇の誕生』でディオニュソス的なもの(酒と狂乱の神で、生命の根源的なあり方としての非合理的なものの象徴)との対比で、アポロンのもの(造形の神で理性の象徴)を個別化の原理と呼んでいることにヒントを得たと述べている。

さて、木村は、この個別化の原理について、この本では、自己の存在の二重性という観点から説明している。この自己の存在の二重性とは、私だけが、たった一回きり生きていく人生の唯一の所有者、という意味での私の唯一性と、他方、大勢の集団のメンバーの一人であり、交替可能な存在としての私一般性である。

「ニーチェが『デュオニソス的』と呼んだのはこの野生の『個別以前』『自己以前』の生命の動きだった。そしてこれが造形神アポロンの手にかかり、仮象としての自己の個別化が意識のスクリーンに映し出される。『外部的』な集団の一員としての『私』の本源性と『内部的』な歴史性としての『私』の仮象性。ここには内部と外部のみごとな逆転が見られる。そしてこのことは『内部』と『外部』、単独者としての自己と一般者としての自己とが一筋縄では片付かない問題を含むことを物

語っている。」(93頁)

木村は、はじめに唯一者としての私を内部とし、一般的な私を外部として区分したが、ニーチェでは、集団的な一員としての私が本源的で内的なものになり、単独者の私が歴史的で仮象的、外的なものとなって、内部と外部が逆転する、と述べている。この木村の自己の二重性についての理解の肯否はさておいて、このような見地から、精神分裂病について、木村は次のように述べている。

「さきに私は、分裂病患者は病前から『自己』の形成が不十分で、個別的自己の個別性が確立していない、そしてこの自己性の薄弱さはそのまま発病後の症状形成にも現れて、自他の境界が不鮮明になるかたちで病的体験を生んでいる、と書いた。そしてこれは、何らかの原因によって自己の個別化という事実が結果的に成立していないというよりは、人間に個別的自己という仮象を抱かせてくれる『原理』そのものが障害されているからだと考えた。そしてこの個別化の原理の生み出した個別的自己という仮象に頼ってディオニュソス的な根源的生命の充溢に掉さずという力業に不幸にして耐え得なかった人、それが分裂病患者ではないか、とも書いた。」(93~4頁)

この木村の分裂病についての考え方が正しいかどうかについては、私には判断できない。私が興味をもったのは、個別化の原理を自己の存在の二重性から説き起こしている木村の叙述の形式そのものだ。木村はさきの合奏の例では、「あいだ」は体験できるのみであり、体験においては実体的なものだが、認識対象としてこれを見るなら、実体的なものとしてあるわけではないという主旨のことを述べていた。私流に言えば、「あいだ」は関係によって生じる超感性的な社会的実体であり、これを思考で捉えようとすれば、分析的抽象に頼る他はなく、関係のなかでの事態抽象によって成立している実体的なものは、思考の分析的抽象によって解体されてしまう、ということになる。

さて、木村の叙述の形式に帰ろう。木村はまず、自己を二重の目でみている、ということから論を起している(91頁)内部からの目と外部からの目だ。そして、次に、内部からは自己の唯一性が見え、外部からは自己の一般性が見える、というように展開する。ところが外部から見た自己の一般性は、実は内部の自己に備わっているのではないか、ということをもニーチェの例を引いてきて、内部と外部を逆転させる。そして、最初の自己を内部と外部という二重の目で見るという出発点自体の不十分性を示している。根源的生命と個別化の原理は内と外といったものではなく、一つの相互関係を形成している二つの契機であり、自己とは両者の間に働きあう作用そのものだ、というのだ。

私流に言えば、ニーチェから引いたディオニュソス的なもの(根源的生命)とアポロンのもの(個別化の原理)とは、社会という関係の場で事態抽象によって自己を形成するが、これは関係の両極であり、思考はこの両極を、契機として取り出すことしか出来ない、ということになる。

木村もこの点に気付いている。二つの契機は「けっして最初からそれとして与えられているわけではない。私たちが自己の個別化を経験してしまったあとで、それ

を構成している二つの契機として事後的に抽象できるだけである」(95頁)と。

4) 「もの」と「こと」

木村は関係における両極としてある二つの契機を二項関係として捉え、この二項関係が現実には非常に謎めていることに注意を促がしている。ディオニュソス的なものとアポロンのなもの、リアリティとアクチュアリティ、みずからとおのずから、ものごと、といった例をあげたあと、木村は次のように述べている。

「これらはいずれも単純に二元論的な二項対立ではない。これらの二つずつの項のあいだには、それを言語化しようとしたとたんに言葉というものの不如意を嘆かなくてはならないような、イメージとして表象できないような、奇妙に謎めいた関係が支配している。そして不思議なことに、この奇妙に謎めいた二項間の関係は、右に列挙した多くの対概念のどれをとってもすべてに通底しているように思われる。」(125頁)

この観点は基本的に正しい。そして、木村はこの観点から、根源的生命と個別化の原理との関係について、次のように再論している。

「リアルなモノの次元ではないアクチュアルなコトの次元での私の生命、私がいまここに生きているという主観的なアクチュアリティの意識が、一方では絶対的に交換可能な単独性の形で、もう一方では無限に開かれた生命的連帯性の形で、二度現れてくるのはどういうことだろう。それは言うまでもなく、本書の主題のひとつである生命概念の二義性、つまり個的生命と生命一般のあいだの関係に由来することである。

私たちは親から生まれ、一個の身体として発生したそのときに、ゾーエー的な無窮の生命を私の身体に引き受けることになる。私は自分が個としての有限な生命を生きていることを通じて、無限の生命一般との関係に参入することになる。この関係は、一方では私自身の生命の根拠との関係であると同時に、他方では私と同様にゾーエー的生命に参与している他の生命体との、とりわけ他人たちとの根底的な——根拠を通じての——関係でもある。そしてこの関係は私が自分の個的生命を終えるまで続く。つまりこの関係は私の内面の歴史、私の『内的生活史』を構成する素材となっている。」(137～8頁)

思考と、関係として実在している存在との論理的な差異に気付いている木村は、この差異についてなんとか了解しようと努力している。ところが、私の見るところでは、この試みは成功しているとはいえない。というのも、人間の社会性ということについての解明が試みられていないからだ。ここで木村が述べている単独性、つまり有限な生命と無限の生命一般との関係ということで問題にされていることは、それについての意識に他ならない。もし意識という契機を捨象されれば、この規定は、あらゆる生命体にあてはまる無内容な規定になるだろう。この二つの関係を意識にのぼらせるものこそ人間であり、そして、人間の社会性がそうさせている。とすれば木村は、ここからさらに人間の社会性についての解明へと進んでいくべきな

のだ。

唯一者(単独者)と一般者との関係は、生命の関係であると同時に、人格的關係である。人間の社会性は、これを人格的關係として捉えたときに現象する。この人格的關係の原理は、二人の人間が社会關係を取り結ぶ場で開示される。特定の社会關係にある二人の人間は、關係の両極である。この關係において唯一者は、同じ唯一者である他者の身体を社会的なもの、一般的なもの、一般的なもの化身とすることで、自らの一般性を獲得している。

近代の人格理解は、人間の人格的同一性(基本的人格に見られる)から出発し、この同一性が個性をもった諸個人という差異へと分化するものと捉えられていた。この同一性は、最初は家父長だけに認められたが、次に成年男子一般、さらには成年女子へ、また人種差別、民族差別から始まって、その形式的解消へと進んできた。だが、この考え方は個の唯一性、言い換えれば、他者の絶対的他性を排除しており、レヴィナスが批判したように、同一性が暴力行為の論拠として用いられてきた。差別の廃止ではなく、他者の絶対的他性を認め、個の唯一性を承認する、この見地から近代合理主義の限界を超えていくことが課題となっている。ところが木村はこの方向には向かわない。

「私の主観的な個別性、死の意識に極限に達する私のアクチュアルな個別性は、個的な身体的生命の側の事象でお種的で非身体的な生命一般の側の事象でもない。それは個的な生命体とその根底にある生命一般とつねに係わりあい、この生命の根拠をみずからの個的生命のなかに受入れている、この關係そのものとして生起する事象なのである。リアルな個的な身体的生命とアクチュアルな生命一般が相接した界面に、そのつどの私のアクチュアルな個別性と主観性の意識が生起する。」(138～9頁)

このように木村は、個的な生命体とその根底にある生命一般とつねに関わっている、という生命一般の規定から、直ちに個別性と主観性の意識を生起させている。ただ生きている、という事態のなかに社会的なものの生成を見ているのだ。これは逆ではないのか。人間は社会的なあり方から、生きているという事態も規定されているのではなからうか。とまれ木村の分裂病についての規定をみてみよう。

「自己の個別化の原理の障害というのは、モノ的な身体的生命がコト的な生命一般に根ざしているその界面において、あるいはモノ的な身体的生命がその生命活動によって生命的環境と出会っているその界面において、身体活動と一体となってそれと区別しがたい仕方で働いている意識活動(こころ)がその自己性/主観性/主体性の成立不全に陥っている状態のことである。分裂病的な個別化の原理の障害とは、単なるモノ的対象的な身体面での障害でもないし、身体と無関係な心理的・抽象的な観念としての自己の障害でもない。それは患者の全存在が身体を媒介にして自らの根拠とのあいだに取り結んでいる關係の、あるいはこの根拠を通して周囲の環境とのあいだに取り結んでいる關係の障害なのである。この關係こそ、『自己』『主観』『主体』などと呼ばれるものにほかならない。」(141～2頁)

關係が病む、ということの解明のステップとして、木村の「あいだ」論を追って

きた。ここで「関係の障害」ということが語られているのだが、その関係は社会関係として独自に解明されていず、生命一般のあり方における個と一般との関係からの類推としてなされていることが判明した。

木村は、分裂病を自己の個別化の原理の障害と見ているが、しかしこれは、逆に、人格の同一化をおし進めてきた近代社会の社会病理を代表する存在、というようにも読める。そして、今日は、同一化が極限に達し、差異化、多元化が時代の基調となってきたのだが、それはそれで、社会病理の大元を解決しないうえでの変化であり、社会病理を代表する存在の交替（統合失調症からうつ病へ）が語られていることと対応しているようだ。

今日の社会病理とは何か、それをどう解決するか

はじめに

現在の日本社会の社会病理とは何かについての合意を形成すると共に、社会病理解決の試みの一つとして、「もうひとつの働き方」を追求することの意義を確認すべく、NSワーカーズとの共催で、サポートセンターが11月に研修会を行いました。その時の報告をもとに、試論を仕上げました。ご検討下さい。

1) 社会病理学の考え

社会病理を対象とした学問に、社会病理学があります。最近では逸脱行動を社会病理と見なす考え方が主流になっています。個人のレベルでは非行や野宿者やアルコール中毒など、家族のレベルでは夫婦葛藤や離婚など、社会のレベルではフリーターの増大、不登校、失業の増大など。これらの逸脱行動が個別に研究され、そして社会工学的見地から種々の対応策が提案されています。しかし、それら個別の病理の原因はなにか、という点になると1人1説で、まだ定説はありません。

ごく少数ですが、逸脱行動が病的なのではなく、全体としての社会それ自体が病んでいることを解明することこそが社会病理学の課題だとする立場があります。それによれば逸脱行動を社会病理とみなす多数派の見解は、社会それ自体は健康なものだ、ということをお前提として受け入れている、というのです。

それで、仲村祥一「社会病理学の現代的課題」(日本の社会学 13『社会病理』(東大出版会))によれば、「社会の総体が病んでいるとする未来世界についてのヴィジョンと、それに基づく現代のトータルな批判なしにはいかなる対症療法も人間を真の意味で救済することにはならぬであろう。」(22頁)ということになるのですが、仲村自身もまだトータルな批判を提起できていないようです。

社会病理学の二つの立場を比較すれば、私は後者の仲村説を選びます。少なくとも逸脱行動が病理で、社会は健康だ、といった、個人の社会病理と社会とを切り離して考える考え方には疑問があり、個人の逸脱行動の背景にある社会的要因を明らかにすることが、社会病理学の本来的な課題だと思います。

2) 心理学と精神分析の考え

社会病理に対する対応策として、精神障害者に対するケアを目的にした心理学のカウンセリング理論が80年代以降流行してきました。この理論は社会病理を逸脱行動と捉える立場に立った、主流の社会病理学の学説と連動し、企業や学校での臨床心理士採用に見られるように、社会工学的な見地からの対応のための具体的手段として機能しています。

このカウンセリングのブームについては、色々な立場から、批判が提起されています。例えば『心の専門家はいない』(洋泉社新書)を書いた小沢牧子は、自らのカウンセリング体験をもとに、それが心を病んだ人たちに対して、社会に復帰させることが目指されていて、個々人がバラバラにされているという社会そのものの病理については考慮していない、といった意味のことを述べています。

また精神分析家には、反精神医学の立場の人々がいて、「心理学化する社会」への警鐘を鳴らしてきています。そして最近では、反精神医学の流れではなかった斎藤環までが、『心理学化する社会』(PHP)で、心理学やカウンセリングの流行について批判しています。

自称ラカン派の斎藤環はこの本で、現代を「システム論的に病み、癒される時代」と捉え、そこに「狂気の広く薄い拡散」を見出しています。例えば「欲望は他者の欲望である」といった従来社会批判の文脈で述べられていた精神分析のテーゼも逆手に取られて、他者の欲望を真似ることが欲望だ、といった、欲望の再生産の手段とされている、というように。

そこで斎藤は、「幻想に騙されて欲望が満たされると錯覚してはいけない」という観点をもとに心理学化する社会の病理を解明しようとしています。「心理学化という大きな風潮に対して、根本的な懐疑を投げかけうるのは、ラカンの手法しかないのである」(211頁)というのです。

3) 物象化論の立場

社会が個々人から成り立っている以上、社会病理は個々人の病理として発症します。だから、つい、個人の責任の問題に帰され勝ちです。しかし、物象化論の立場からすれば、個々人が自己責任で処理できる領域は、現実には本人が考えているよりもずっと狭いのです。ところが意識の上では全領域のように思い込まれていて、そしてこの思い込まれる仕組みが、物象化なんですね。だから私は、現在の社会病理の大元には、人間の意識の倒錯をもたらす物象化があると考えているのです。

物象化論にも色々ありますが、「人間が物化され、物が人格化されることで人間が物の関係に支配される」といった内容が共通理解としてあります。単なる自然物が人間を支配する社会的な力を持つ、そのような物を「物象」と呼んでいるのです。私の場合は、商品から貨幣が生成される過程に注目しています。

簡単に言えば、商品から貨幣が生成される過程は、商品所有者達が自分の商品の価値を単一の商品金の生身で表示する、という無意識のうちでの本能的共同行為に基づいています。この過程では商品所有者達は、商品に自分の意志を宿していて、商品という物象に自分の意志を支配されているのです。

ここの理解が決定的なので、この過程を別の視点から見てみましょう。商品所有者は自分の商品を市場で売りに出す場合、自分の商品で他人の商品が買えればそれに超したことはありません。しかし、全ての商品所有者が、自分の商品で他の商品を買おうとすれば、誰もがそれを必要だとは限りませんし、又必要としている人も、自分の商品で買おうとする訳ですから、例外を除いて一切の取り引きが成立しなくなってしまうのです。

現実の市場では、商品所有者は、自分の商品で他人の商品を買おうとはせずに、自分の商品に価格を付けて売り出しますね。その時商品所有者は意識してはいませんが、貨幣生成の共同行為に参加したのです。自分の商品に価格を付ける、ということは、貨幣となら自分の商品を売ってもいい、という意思表示をすることですが、市場では全ての商品所有者が同じ行為をしているのです。そしてこの共同行為が成されるので、金属の金が、購買力を持つという、社会的な力を持った貨幣になれるのです。

単純化すれば、人々は市場で商品を売りに出す時に、意識はしないのですが、貨幣生成の共同行為に参加し、貨幣を生成させています。だから、もし、誰もが物を商品として売りに出さず、市場が成立しなければ、商品も貨幣もなくなってしまいます。もちろん、別の生活のシステムが生成されていなければ、今更市場なしではやっていけません。でも、貨幣で物を売買する市場というものも歴史的な産物で、人間生活にとっての永遠の自然ではないのです。

4) 社会病理の大元とは

この商品による意志支配に基づいて貨幣が生成され、貨幣に意志支配されることで資本が生み出されてきました。ところが、物象化が社会病理の大元となるのは、人間がこれらの物象に意志支配されても、支配されているとは考えず、逆に自己の自由の実現だと考えてしまうことになるからですね。

その理由は支配-被支配という観念が政治的なもので、人と人との関係が念頭に置かれているからではないでしょうか。人間もふくめ、生物は自然環境に順応することではじめて生きていけるのですが、この順応はもともとは自然法則に支配されたものですね。ここでは法則に順応することで、それに支配されながらもそのことで生物は自由を獲得しています。

現在の社会で商品の法則に人間が順応している場合も同じ事が起こります。商品は単なる物として現れますから、自然法則にアナロジーされてしまうのです。

しかしながら商品は一方では自然物としてありますが、単なる自然物ではなく、交換可能性という社会的な力を持っています。簡単に言えば、自然物に価格を付けることで、それが商品にされるのです。そして、価格を付ける、ということは、目には見えない市場という経済的な社会システムの中に、物を参入させることで、貨幣を生成し、自然物を相互に物象にし、その物象に人間の社会的な力を与えるのでした。

そして、重力の法則に順応するのと同じように、この 200 年間に商品や貨幣や資本といった諸物象の法則に順応し、意志支配され続け、そこに自由の実現を夢見続けながら、実は社会の存続の危機を招来してしまったのではないのでしょうか。そしてこの危機が、さまざまな症状をとった社会病理を発症させています。この意味で私は、今日の社会病理の大元には、商品や貨幣や資本といった諸物象による人間の意志支配があると主張しているのです。

ところが、この考え方はなかなか理解されませんでした。経済学者や哲学者には、物象化論の立場に立つ人々が増えては来ているのですが、物象化的錯視について啓蒙によって理解させよう、という認識批判のレベルで問題を提起している人々が多く、社会関係の組み替えまで構想している人は少数です。

この考えが理解しにくく、広がりにくい理由は、意志支配の仕組みが理解されたとしても、現実の物象化的錯視はそのまま続く、という問題があります。普通認識を変えれば、対象は必ず違ったように見えるのですが、物象化の場合、物象化論を理解することで自分の認識を変えてみたところで、対象そのものの見え方は全然変わらない。

これまでの社会変革の運動は、ものの見方を変えることで、ものの新しい見え方をつくりだす、という意識変革を手段としていました。ところが、今日この種の運動がゆきづまっていますが、その原因も、物象化にあつては意識を変えても、ものの見え方が変わらない、というところにあるのかもしれない。

5) 脱物象化の運動

意識を変えてもものの見え方が変わらない、とすれば、意識を変えることが運動のキメ手にはならない、ということです。だから、物象化論を理解して、この理論で人を獲得する運動を目指しても、成果は得られないことになります。ではこの理論は無意味でしょうか。この理論を獲得しても、ものの見え方は変わりませんが、しかし、ものの見え方が何故変らないかは理解できます。そして、この人間の認識内容がある種の幻影であることは確認できます。そしてここまでくれば、人間の意識に幻影を生じさせざるを得ないような社会、経済システムに代わる、もうひとつの社会、経済システムを設計できます。これを脱物象化の運動と名づけましょう。

このもうひとつの社会、経済システムは、いま、ここでつくりだすことができま

す。ただ、今日の人間の社会や経済についての認識内容を、幻影的だと見る感覚や理解なしには、この第一歩を踏み出すことは難しいでしょう。

とはいえ、今日では、この第一歩を踏み出せるような追い風が強くなっているようです。お金の法則に順応しているだけでは持続可能な社会は実現できないし、人間も生き難い、という考えは結構広まっています。問題は、これらの人々がまだお金に代わるメディアをもてていない、というところにあります。

お金のメディア力は、意志支配に順応することで自由の実現を夢見てしまうという人間の順応力と、それなしには生活ができないという飢えの規律にあります。お金に順応しないという生き方を求めるならば、この二つの問題を解決しなければなりません。とすれば、その解決は、お金をコントロールできるような事業のシステムを創り出す、というところに求めることができるのではないのでしょうか。

ワーカーズ・コレクティブは、資本家と雇われの賃労働者という関係を廃した、労働と出資と経営のシステムです。ここにはお金をコントロールしながら、参加者の生活を保証して行ける可能性があります。そして、それが実現すれば、ここに一つの新しい文化が生まれたことになり、文化はそれ自体が伝染していくものだから、ここにワーカーズ・コレクティブの参加者がメディア力を持ち、メディアとし登場することになります。

文化にも色々な捉え方がありますが、ここでは実践的な見地から、人間の生きざまが発信する社会形成力だと規定しておきましょう。お金に順応せず、逆にそれをコントロールできるような生き方が実現すれば、その生きざまが今の世間並みの文化とは異なる社会形成力を発揮し、それがメディア力として働くことが期待できるのではないのでしょうか。

NSワーカーズの活動の基本的考え方

2003. 11.19

1) 人間が生きやすい社会を求めて

今日の社会は自由な個人によって形成されていますが、その結果人間の生き方についてまで自由選択課題とされています。ところが現実には自分の思いのままに生きていくことはできず、生活していくためには何らかの妥協を強いられます。

何故妥協を強いられるのでしょうか。それは大勢の他者がいるからです。にもかかわらず、今日の社会では大勢の他者は人格としては自分の前に現れてきません。それは競争相手であったり、雇い主であったり、従業員であったり、商品の売り手であったりはするのですが、ここには相手の人格を認めた上での関係ではなく、世間一般のしきたりとして、お金で関係が取り持たれています。

そこで一つのジレンマが現れます。自由選択課題としてある生き方について、妥協をせずにある生き方を選択した時、それが世間一般のしきたりに合っていないければ事実上その生き方は実現されないのです。今日の社会は自由な個人から構成されていると観念されているにも係らず、この自由には制限がありました。お金の関係からは自由にはなれないのです。

60年代の経済が高度成長している時代には、お金の関係も社会を近代化していく方向性を持っていて、個人の生き方として社会の進歩への貢献を選んでも、お金の関係とは折り合っていました。ところが30年後の90年代になると日本社会は工業化という意味での開発が終わり、経済成長も停滞し、社会は大きく変化しようとしています。そして21世紀を迎えましたが、現在でも社会の進歩についての合意は得られてはいません。

社会の進歩についての合意が困難になった一つの原因は、お金の経済が80年代後半から大きく変化し、それがものを交換する手段や、ものを製造する手段という従来の機能のほかに、お金を売買して利ざやを稼ぐという第三のシステムが世界規模で成立し、これが支配的になったことに求められます。第一の、ものを交換するシステムからは、個人の自由と平等という観念が生まれてきますし、第二の、製造するシステムからは、工業化による開発という社会の進歩のイメージが生まれてきます。しかし第三の、利ざや稼ぎのシステムからは、社会がどうすればいいのかというメッセージは生まれてきません。『金持ち父さんと貧乏父さん』という本がありましたが、この第三のシステムでは他人を出し抜くことが奨励されていて、社会など視野の外に置かれます。

自由と平等の観念はほぼ実現されて世間一般の通念になり、工業化も達成された後、メディアとしてのお金が送るメッセージも混濁してきました。人間が生きやすい社会をどう作っていくか、ということが課題となっているのですが、環境にやさしい社会や、持続可能な社会といった課題と同様に、今のところ単なるスローガンを掲げたにとどまっています。そこで私たちは人間が生きやすい社会の実現を今ここから目指すことにしました。

2) 人がメディアになれる社会

お金の法則に順応しているだけでは社会が持たないし、人間も持たない、という考えは結構広まっています。ところがこれらの人々がまだお金に代わるメディアをもてていないという現実があります。

お金のメディア力は、意志支配されることに順応するという人間の順応力と、それなしに生活ができないという飢えの規律にあると思われれます。お金のメディア力を弱めようとするならば、お金に順応するのではなくこれをコントロールできるような事業のシステムがとわれます。

ワーカーズ・コレクティブがお金をコントロールしながら、生活を保証して行けたら、ここには一つの新しい文化が生まれたことになります。この文化はそれ自体

が伝染していくものだからメディア力を持つとおもわれます。

文化とは人間の生きざまが発信する社会形成力であり、お金に順応しない生き方が実現すれば、その生きざまが今の世間並みの文化とは異なる社会形成力を発揮しそれがメディア力となるのではないのでしょうか。

メディアとしてのお金の力は今日でも強力です。生き易い社会とは、人がメディアになれる社会だと考えると、お金をコントロールできるような事業活動がメインになった社会というイメージが描けます。そしてこのような事業は既に多くの地域で始まっています。そのポイントは雇われて働くことを止めて、ワーカーズ・コレクティブのように、働き手が出資もし、事業の管理もする事業体を創り出すことです。

このような「もう一つの働き方」を実現できる事業所をたくさん作ることで、事実上お金の関係で制限されてきた、生き方における自由選択権の幅を拡大していきます。

3) 家族を地域に開く

お金で関係を取り結ぶことが始まると、伝統的社会(資本主義以前の)人間関係は順次お金の関係に代替されていきました。まず都市化が始まり、都市近郊の農地が宅地にされ、農村共同体は解体されました。それに伴い大家族も核家族へと解体されていきました。

伝統的社会では家族は大家族であり、農業や手工業の生産単位であって、それは地域の共同体に開かれていました。ところが大家族が核家族となり、生産の単位でなくなって労働力の供給基地となり、又地域の共同体などの人間関係が解体されることで、例えば団地のように、人々が集合して住んでいながら、人々の隣近所の付き合いが無く、人々は核家族に閉じ込められてしまいました。

お金の関係に頼った核家族では次世代を育てられない、この事がこの10年間で明確になってきたようです。お金の関係とお金のメディアが発信する文化が社会の進歩や人間の生き易さや環境保全と結びつかなくなった今日、あらためて、家族を地域に開くことからやり直さなければなりません。

家族を地域に開くといっても、以前にあった地域の人間関係は、完全に崩壊しています。地域の人間関係を新しくどう紡いでいくか、ということと、家族を開くということとは同時進行されなければなりません。

そこで地域の人間関係を新しく紡ぎ出せるものがワーカーズ・コレクティブではないのでしょうか。

上野千鶴子の家族論への疑問

2003. 11.29

上野千鶴子の家族論への疑問、というテーマで準備をしましたが、家族の変わりようがあまりにも激しいことが分かって、家族の現状を把握することに重心を移しました。

A) 40年間の変化

1) 主要統計指標

*人口 60年 9430万人。 2000年 12692万人。 増加数 3262万人
但し90年代に入って増加率は0.2%に落ちる。高齢化が著しい。

*世帯 60年 2254万世帯。 2000年 4678万世帯。4.14人から2.67人に。

*産業 輸出入の変化。産業別就業者の変化。階級構成の変化。女性の雇用の増加

と雇用の多様化、非正規化による差別の増大。

*労働争議 組合組織率の低下。市民運動のセンター的役割が労働組合から生協に。

B) 家族の現状

1) 山田昌弘『家族というリスク』(けいそう書房)の切り口

*未婚率の上昇

20歳以上の未婚者は1500万人にものぼる。

1970年と95年を比べると、(25歳~29歳の未婚率)

女性 20%→50% ほぼ直線的に増加。

男性 50%→68% ほぼ直線的に増加。

*親との同居

20歳~34歳までの未婚者の男性6割、女性の8割以上が親と同居している。(パラサイトシングル1000万人)

*離婚

1999年には離婚数は25万組で、結婚数の三分の一に達する。

*近年の家族的関係を求める欲求の高まり

家族が長期的に安定的でなくなった。高度成長期の標準的家族形態のモデル、夫一人の賃金で家族を養える。これを支えた終身雇用や年功序列賃金制度の崩壊。近代以前の伝統的社会では、個別家族が子どもを養えなくなっても、大家族、ムラなどの共同体が養育を保障した。今従来のモデルが

解体していつているのに、新しいモデルはまだ形成されていない。

* 家族のリスクの増大

社会が豊かになったため、今の生活水準を保つことが目的となり子どもが親の老後の世話をしなくなった。生活水準を落とさないため、家族のメンバーを増やさない、家族解体の危機を避ける。

* 家族政策の問題

すでに古くなってしまった標準的家族形態をモデルとして、家族政策がとられて来た。問題は経済的に豊かになったため、このモデルを維持するコストが増大したことにあり、どのような家族形態をとっても不利にならないような公正な制度が必要。自由競争、自己責任の原則を家族にも。

* パラサイトシングル

親と同居する独身者 1000 万人のうち数百万人を占める。若いうちに豊かさを味わい尽くす。これは活力、やる気といった日本人の精神構造にダメージを与えている。若年層に保守化をもたらす。少子化の本当の原因も親との同居にある。結婚して新しい家族をつくって独立すると、ゆとりの無い生活になる。

* 家族政策の基本

それはパラサイトシングル対策に置くべき。さまざまな手段で若者の生活を自立させる政策を取る必要がある。

2) 今日の家族の問題点

* 超高齢化社会の到来

伝統的社会的高齢者のケアをするシステムが解体されてきたのに、新たなシステムは未形成。ケアの領域をすべて商品化することはできず、助け合いのシステムを再構築する必要があるが、今日の共働きの核家族には担えない。

* 豊かな若者の将来像

フリーターやパラサイトシングルでは日本の将来の人材たり得ないと言うことで中央官庁も施策を講じようとしている。しかし今の若者が上からの指導に従うことはない。

* 核家族の問題

引きこもりの若者 100 万人。今日の核家族では子育ても難しくなっていることの表明として考える必要がある。

C) 上野千鶴子の家族論

1) 家族の解体論への反論

* 日本社会での「家族の危機論」

家族が核家族になることで従来家族に担われてきた諸機能が、うまく働かなくなっていることを指しているが、(老親介護と育児)これを核家族の働く母親の責任に帰すのは間違い。核家族を取り巻く社会環境を核家族に

ふさわしく成熟させることが必要。「ここで起きているのは、資本制と家父長制のあらたな発展段階に見合った生産と再生産の領域の再編成なのであり、家族は「解体」しつつあるのではなく、たんに<近代>家族から別なものへと「再編」されつつあるにすぎない。」(『家父長制と資本制』243頁)

2) ジェンダー論から見た家族(『家父長制と資本制』より)

* ジェンダーとは

セックスは「生物学的性別」、ジェンダーは「社会的文化的性別」。個々の人間が社会の中で男または女として生きることを決定づけるのは、セックスではなくジェンダーである。

* 家事労働の概念

「マルクス主義フェミニズムの最大の理論的貢献は、「家事労働」という概念の発見である。「家事労働」は「市場」と「家族」の相互依存関係をつなぐミッシング・リンクであった。」(31頁)

マルクスは労働力の再生産を自然(本能)的なものと見なした。市場の外部にある家族の分析を放棄した。

「市場のどんな条件が、家事労働を市場から放逐せしめるに到ったのか、を問うこと」(38頁)

「家事労働の概念は女性に、理論的な武器を与える。家事労働は、金になるようになると、労働に違いはなく主婦がやらないとなれば誰かに代行してもらはなければならない。その意味で有用で不可欠な労働でありながら、女性に対してどんな法的・経済的な補償も与えられず、無権利状態に置かれているとなれば、これは不当に報酬の支払われない「不払い労働」だということになる。」(38-9頁)

* 家事労働の概念への疑問

主婦の家事労働にペイが支払われていないと言うことは事実だが、それが無償労働だと言うことにはならない。と言うのも生活が保証されており、家事労働の代価としてそれが払われている訳ではないが、無償ではない。奴隷の労働もペイが払われないが、しかし無償ではない。奴隷主は奴隷を養わねばならないからだ。主婦の経済的地位は奴隷に似ているので「家内奴隷制」と呼ばれたこともあった。家事労働が支払いと言う形式は取らないが働き手が生活を保証されている、という点で無償の不払い労働とは見なせない。上野は家族の中に男の支配の根拠を探ろうとし家事労働の不払性に注目したが、それが無償だと言う点に重点を置いて男社会を批判するのは、批判の方向性を誤らせるように思われる。

* 家族の概念

「家族は打算や功利の入り込まない無私の共同体と考えられてきた。」(60頁)フェミニズムは「家族の中にはっきりとした男性支配や、あからさまな経済的搾取があることを指摘」(60頁)した。

「家庭内で女性によって遂行される「家事労働」という労働に焦点を合わ

せることは、不可分な一体と考えられていた「家庭」の中から、男と女という「個人」を引きずり出し、その間のポリティックス（性という政治）を明らかにすることである。」（63頁）

この家族という制度の中で何が行われているか。「家族は、性と年齢（世代）を編成原理とした制度であり、この中では性と年齢に応じて、役割と権威が不均等に配分されている。…家族の中の役割と権威の配分は、予め制度的に決まっている。」（65頁）

* 家族論への疑問

家族の中で何が行われているか、と問う時の上野の回答の中に家族の機能が抜け落ちている。ジェンダー視角（男による支配関係の解明）から家族を切ったため家族を時間的流れの中で捉えられなくなっている。労働力と次世代の生産と再生産という家族の機能、そしてこれは家族の共同的側面を成すが、これが切り捨てられることで、家族を支配・被支配関係に一元化することになっている。現実の家族は共同性と支配性との二重物ではなからうか。

* 要求とオルタナティブ

「フェミニストの要求は、第一に再生産費用の両性間の不均等な分配を是正すること、第二に、世代間支配を終了させることにある。後者の点については、(1) 再生産費用を子供自身の権利として自己所有させること、児童手当の支給と、(2) 老人が独立できるだけの老齢年金の支給と公共的な介護サービスの確保、の二点があげられる。」（106頁）

オルタナティブについての紹介「男と女の間の変革」(292頁) えること。「私たちが作り上げなければならない社会とは、相互依存を認めることが恥ではなく解放であるような社会である。」(293頁)

* 要求への疑問

上野の要求は法律を変えて社会の費用で不均等の是正をすることで両性間の平等を実現しようとするものだが、先に見たように、今の日本の現状では実現できそうも無い。上野の政治の概念は支配・隷属関係しか念頭に無く、だから家族内の権力関係を告発することで法律の改正を実現しようというコースに乗ってしまっている。つまり政党政治にからめとられてしまう。

協同組合運動の観点からすれば、政治とは自治の実現であり、今日では問題解決型の運動によって、新しい社会を地域作りとして実現していくことになる。オルタナティブはこの運動の中で芽生えてくるのではなからうか。

3) アンペイドワーク論の射程（『論争』より）

* 設立総会記念講演録より

「ところで事業体であり運動体でもあるワーカーズ・コレクティブとは一体生協組織のなかでどこに位置づけられるのでしょうか。ワーカーズ・コレクティブはペイドワークだが、じゅうぶんなペイドワークではない、ハンパなペイドワークです。」（206頁）

* あとがきより

「アンペイドワークという概念は、女が家父長制という敵と闘うための武器でした。」（310頁）

「それでは、「女のしていること」に「アンペイドワーク」という概念をもちこむことには、どういう効果があるのでしょうか。そのいちばん大きい効果は「女のしていること」を「男のしていること」と、同じ尺度（つまり貨幣ターム）で比較することが可能になる、ということです。…くらべてみてはじめて、これは差別だ、ということができるようになります。」（312頁）

「アンペイドワークという概念は、「組合員のしていること」「ワーカーがしていること」「職員がしていること」を、（貨幣という）同じ尺度で比較することを可能にします。となれば同じように働きながらなぜこれほど報酬が違うのか、という素朴な問いが生まれるのも当然でしょう。」（313頁）

「多様な働き方を認めた上で、カテゴリーのあいだに差別の無い処遇をかくほする」(314頁)「フルタイム、パートタイム、派遣、臨時のような雇用形態のあいだを自由に移動する（しかもそのあいだの差別をとまわずに）ことが、労働市場の柔軟化のめざすひとつのゴールであります。」(315頁)

* アンペイドワーク論への疑問

労働市場の柔軟化は差別するために創り出されたシステムです。これを「差別をとまわらないようにするには、政治的力が必要ですが、アンペイドワーク論はその主体形成の展望を持っていないのではないか。

ワーカーズ・コレクティブの原理は雇われて働くこととは別の「もうひとつの働き方」にあり、共同で、出資し・働き・管理する働く場です。その支払いは賃金ではなく、分配金です。それを世間並みの賃金と比較し、それに近づけようとしたり、世間並みの賃金を下げるよう要求することは大いに疑問です。

D) ワーカーズ・コレクティブの意義

* 家族と地域の現状

家族の中の個人がばらされてきた。男に一家を養える給与を払わず、しかも労働力の数を倍増させ、階層差別で抵抗運動を封じている現状の矛盾は次世代を育てられないという欠陥を露呈しはじめています。

* 家族を地域に開く

社会に費用を要求することをメインにするのではなく自分達で解決しようとするれば、家族を地域に開くことが必要だが、地域の資源もなくなっている。（コモنزの解体）。

* 地域の資源作り

ワーカーズ・コレクティブの主要な役割は、すっかり解体されてしまった

地域のコモنزの再建の担い手としてあることであり、その中心的な課題は、家族を地域に開くことを保障するところにある。

* 政治の革新

政党政治や市民運動の政治は公に要求する運動を基本とする。いま公は要求を受け入れるだけの財政力を失っていて、行政は市民運動の手法で住民に自己責任で問題を解決させようとしている。協同組合は行政とは別の方法で問題解決に取り組む。この新しい政治のイメージを明らかにすることが問われている。

後記

木村敏についての論文 1 号遅れで掲載します。このあと社会病理についての理解が進み 11 月に研修会をやりました。その時の報告をもとに「今日の社会病理とは何か、それをどう解決するか」を書きました。又研修の時に提起した「NS ワーカーズの活動の基本的考え方」も若干の重複がありますが掲載します。

あと分量が少なかったので、協同組合運動研究会で報告したレジュメを載せます。「上野千鶴子の家族論への疑問」がそれで、このレジュメに基づいて次号に上野千鶴子論を書くことにしています。論として書くとなるとこのレジュメとは異なる物になりそうなので先に公表しておきます。実を言えばニュースタートに係って家族論の研究の必要性に気づき色々調べていましたが、いい研究に巡り合えませんでした。たまたま上野千鶴子と、グリーン・コープ専務理事、行岡良治の論争が本になっていました。『論争、アンペイドワークをめぐる』(太田出版)がそれですが、この本を研究会で取り上げることになり、上野さんの『家父長制と資本制』(岩波書店)などの家族論を読むことになりました。そこで上野さんがジェンダー視点から家族を研究していることを知り大いに刺激を受けました。と同時に上野さんがグリーン・コープの問題意識とすれ違ってしまう原因も分かったような気がし、それと共に家族論の研究方向が見えてきたように思ったのです。

その概略は、家族を地域に開く時に地域の資源がほぼ全滅しているという現実から出発しようとする時に何からはじめるべきか、という問いに対する答えとして、グリーン・コープの福祉ワーカーズがあったということであり、ニュースタートの取り組みもこれと連動している、ということでした。これに対して家族論の専門家の多くは家族を地域に開くという視点がなく、核家族を支える公的支援を要求していることでした。この方向は問題の解決には到らないように思います。

もう 12 月、サポートセンターも法人格を取得し、専従者を置きニュースタートと共同の事務所を富田の駅前に開くことになりました。あと色々な事業計画も検討されています。来年を事業的な意味での飛躍の年にしたいです。